

木村宏之〔著〕

〔新訂版〕面接技術の習得法

——患者にとって良質な面接とは？

A5判並製・金剛出版

2025年11月刊

定価3,630円（税込）

評者＝梨谷竜也（馬場記念病院臨床心理センター）



心理面接において「技術」を学ぶ際、各学派に固有の理論や技法に関心が向けられやすい。しかし臨床の現場では、そうした技法が十分に機能しないと感じられる場面に少なからず遭遇する。面接の質を左右している要因がどこにあるのかについて、あらためて立ち止まって考える機会は、必ずしも多くはない。

このような問題意識に応える形で編まれているのが、『〔新訂版〕面接技術の習得法——患者にとって良質な面接とは？』である。本書は、特定の理論や技法を体系的に解説するマニュアルではなく、「患者にとって良質な面接とは何か」「面接の本質とは何か」という問いを軸に、面接の基礎となる姿勢や応答のあり方を丁寧に掘り下げている点に特徴がある。面接を一連の操作としてではなく、相互作用の過程として捉え直す視点が一貫して示されており、面接について考え続けるための枠組みを提供している。

面接技術を学ぶ過程では、どうしても各学派の理論的枠組みや具体的な技法に目が向きがちである。しかし本書を通読して印象に残ったのは、そうした技法が機能するための前提として、クライアントの語りをどのように聴き、どのような態度で応答するのかといった基本的な姿勢が一貫して重視されている点である。面接の成否を左右するのは、必ずしも目新しい介入ではなく、むしろその土台にある姿勢であるという、本質的ではあるが見過ごされがちな視点が丁寧に言語化されている。臨床経験を重ねた立場から読んでも、自身の面接実践を振り返るための視座を与えてくれる一冊である。

著者は精神科医であり、また精神分析家としての立場から、患者理解や面接者の内的過程を重視する視点が随所に示されている。ただし精神分析的概念が前面に押し出されることはなく、面接に臨む姿勢や思考のあり方として提示されているため、精神分析を専門としない臨床家にとっても理解しやすい。心理職の立場

に読み替えても十分に有益であり、著者が多様な対人援助職を読者として想定して執筆していることがうかがえる。

なお本書は新訂版として刊行され、旧版に2章が増補されている。1章は精神分析のエビデンスをめぐる検討であり、エビデンスに乏しいとされてきた時代から近年の知見の蓄積に至るまで、それを守り続けてきた著者自身の歩みが描かれている。他方、自殺危機への対応を扱った章は、今日の臨床実践において避けて通ることのできない主題であり、本書の主題を現実臨床へと確かに接続する増補であったといえよう。

本書は、初学者にとっては実践の指針となり得るだけでなく、一定の経験を積んだ臨床家にとっても、自身の面接をあらためて点検する契機を与えてくれる。また、若手臨床家の指導やスーパービジョンの場面において、何をどのように伝えるべきかを考える際の手がかりが盛り込まれている点も、本書の重要な価値であろう。